

モアイはアフ（石壇）の上に立っていたものと、そうでないものがあるが、ここではアフに関する解説は省略させていただくことにする。

Moaiが雨乞いに関係があったとする説話もあるが、ここではその点についても考察しない。しかし、住民の集落の農業を見守っていたことから推察できるように、Mauiは一種の農業の神とされていたことは明らかである。

そう考えると、トンガ王国にある巨石の遺跡Haamonga-a-Mauiが、朝日の陽光がそこに落とす影によって、季節を島民に知らせるための一種の暦であったといわれるのも、それが農作業に役立つためのものだったと解すべきであろう。

それはともかく、私がイースター島を訪れた時からのちに、Moaiにつけられていた眼球の破片が見つかり、Moaiは本来は眼をもっていたのだという説が出てきた。しかし、私はすべてのMoaiに眼がついていたとは到底信じられない。私はMoaiを男根を表現したものと信じるからである。

私は1974年1月にイースター島に行ったのだが、当時立っていたMoaiはヘイエルダールが復元したアナケナの丘に立つ孤独なモアイ、1968

年にフランスの出版社「パリ・マッチ」が資金を出し、大きいクレーンを持ち込んで、石帽を載せた姿に復元された孤高のモアイと、少し離れたアフの上に立ならんだ5体のモアイ、そしてかなり高い丘に登ったところに、大きいアフがあって、その上に7体のMoaiが西方の太平洋を望見するように立ち並んでいた。これはヘイエルダールに協力したアメリカとチリの学者の協力で復元されたものであった。以上合計14体のMoaiが立っているだけであった。

私自身の感傷かも知れないが、島の東南岸の海辺に倒れたMoaiが何百体もある景観にこそ、「語らざる島」イースター島の淋しい魅力があるのだと思う。もし何百体ものMoaiの立っている海辺が現実的に復元されたら、イースター島はみにくい観光地になってしまうのではあるまいか。

最近伝えられる日本企業によるMoaiの復元は、風化のひどい砂岩の倒れた石像の保存という点では称賛されるべきだが、クレーンで倒れたMoaiを立ち並ばせるという点では、その復元地点の選択に十分な配慮をすることと、立たせるMoaiの数を多くしないことを、私の希望として特に強調しておきたい。



アナケアのアフの上に立つモアイ。

(写真・渡辺 惇)



アフ・タハイのモアイ。(写真・渡辺 惇)

これは伝統的な酋長が、タロ芋などの酋長向けの食料を要求するため、自分たちの食料を栽培する余裕もないほどの圧政に苦しんでいたが、クマラが導入されて庶民たちの生活が自由に解放された、というような社会的な改革が実現された事態を示唆した意味の伝承といえる。

マウイは母親の家事などが忙がしすぎるので、太陽をしばりあげて、その運行を遅くしたという説話がある。これもクマラの導入によって女性の家事労働を楽にした、ということの意味していた。

このように考えてみると、クマラの導入によって、ポリネシアの島嶼社会には大きな変革があらわれたといえる。とくに伝統的な酋長が一般住民に対して圧政を続けていたような島では、クマラによって生活の安定した庶民の改革的な運動が展開した。

しかし、マウイがもたらしたポリネシア社会の改革が、どのような政治的な変革にまで進展したのかは、その改革が進み始めて間もない頃に、欧米諸国によるキリスト教の布教から植民地主義体制の確立へと、強大な動きが浸透してきたために、明確に評価することはできない。クマラのポリネシア諸島への伝播、すなわちマウイ神話の波及は、欧米キリスト教勢力の渡来より時代的にはほんの僅かに早いだけであった。

マウイ神話の内容に、キリスト教関係の神話やキリスト教的な解釈が溶けこんでいる例も、クック諸島その他において見られる。マウイに関する伝承を記録したのは、主としてキリスト教の伝導者であったことから、その伝承が歪められた例も少なくなかった。

ここで、話題をイースター島のモアイのことに転じよう。モアイはイースター島の最高の神マケマケが偶像化されたものだが、その後、一般島民の酋長や家長が死亡したときには、その権威を記念するためモアイを建立したといわれる。それがマケマケ神に対する強い信仰を表現するためであったのはいうまでもなかった。

そのマケマケ神は、ポリネシア世界の各地にも伝えられたて行った。しかし、それぞれの島の社会の言語によって、たとえば(k)音のないタヒチではMehamehaと変わり、「恐るべき存在」を意味するものとなった。ただし、Mahamehamea

に変形したものもあって、それは「聖なる」という言葉である。

クック諸島のラロトンガに伝わると、Mekamekaとなったが、それは、専ら古代の神官の神聖な語りの中において用いられた言葉であるという。ニュージーランドのマオリ語ではMakamakaとなるが、それは「呪文をとこなえる」とか「航海終了後にタブーを解除するための儀礼を行なう」という意味である。

次にハワイの王朝が「カメハメハ」Ka-mehameha王朝といわれることは日本でも知られている。Kaは冠詞であり、mehamehaは「孤独、沈黙」という意味だが、別に「願望、希望」を意味するmakemakeという言葉もある。またタヒチにおいて“聖なるもの”を意味するMahamehameaという言葉があることは、Kamehamehaのルーツだとも考えられる。

このようにして本来ポリネシアの神ではなかったMakemakeは、現地の言語によって変形されながらも、崇拝されるべきものに関連するものとして伝わって行ったわけである。その伝播は、Maui神話の伝播と直接に結びついてはいないが、イースター島のMoaiに原点をもつ点に関連をもっているといえる。

この点に関して、タヒチなどでMauiといわれる2級の神になったのは、イースター島のMoaiが小さいMoai toromiro(木製モアイ)の形で伝わったという事実からであった。

最後に書き加えておきたいことは、イースター島のMoaiがどんな役割を果たしたかである。

Moaiが男根を象徴するものとして、ポリネシア人の伝統的な血統尊重を表現したことは、Moaiの頭上に石帽の載ったものがあることは、そのpukaoとかkau-hitirauといわれる赤い石材の石帽が、石臼を形どったもので女陰を象徴するもので、そのMoaiは多産豊饒のシンボルとして信仰されていたとする説もある。

しかし、ここではこうした説話などについて評論することは控えたい。ただイースター島のモアイは、アフ・アキヴィに立つ7つのモアイ、アナケナの孤独なモアイ、アフ・タハイのモアイなどを例外に、いずれも海に背を向けて立ち、住民の農作を見守る形で立っていたことに注目したい。

Mahuika はここでは女性で、その夫は Muri-haka-whenua であり、その娘 Taranga の息子が Maui である。

**ハワイ諸島** Tuu-ma-heke に当たる Mahuie はここでは女だが、それは Maui の祖母だとされている。

ここでイースター島にホツ・マツアが上陸したとき生まれた赤ん坊、ツー・マ・ヘケを思い出して欲しい。それは「ヘケ」(すなわちタコ) という名によって、1本の茎に8つのイモをつけたクマラを象徴するものだった。マウイがそのツー・マ・ヘケの子孫だということは、マウイはクマラを擬人化したものだということを示している。

マウイを知った最初のヨーロッパ人は、さきに述べたように1769年6月にタヒチを訪れたキャプテン・クックであった。クックは路上でかなり多くの島民が、カゴ細工の奇妙な人形を持ち運んでいるのを見た。長さ2.5メートルもあるその人形は、前向きに3つと後向きに1つの顔をもっていた。

案内役のタヒチ人トゥピアによれば、その人形はマウイと呼ばれる「2級の神」で、人形劇などの催し物の際に観衆の前で、1人の語りべの話や音楽を背景に操られるのだという。

トゥピアによれば、普通は7つほどの顔をもつ偶像で、異常に高い知能と強い体力をそなえ、数々のトリックを実行しうる信仰されない神だという。キャプテン・クックはそのマウイの業績なるものが余りにも荒唐無稽なものだったので、記録しないで終わったといわれている。

さきに述べたルオマラ女史の「1,000のトリックをするマウイ」は、タヒチだけでなくポリネシアの各島で伝承されている「トリック」をとりあげている。トリックといっても悪い意味ではなく、文化上の英雄とされる者のことを「トリックスター」と呼ぶような、一般の住民の常識を破るような業績のことを指しているのである。

そうしたトリックスターが出現するのは、複数の異質な文化が接触し競合しながら存在する社会においてである。イースター島で南アメリカのインディオ文化とポリネシア文化とが接触し共存していたため、そこにモアイのような巨大な石像を崇拝する習慣が作り出された。マウイがモアイ

の代理人であることは上述の通りである。

マウイ神話はポリネシア圏全体に伝わって行ったが、そのルーツとなった巨石像モアイの方は、18世紀の中頃から倒れはじめたことは先にふれた通りであった。なぜ倒壊したのかは明らかでないが、私は敵対する2派の住民の一方が、他方の住民の崇拝するモアイを故意に引き倒すようなことはなかったと思う。

1770年に来島したゴンザレスが、島民はモアイに非常な畏敬の念をもっていると指摘しているように、それを引き倒すのは敵の崇拝する石像であっても宗教的に不可能だったといえよう。

私は1774年には一部のモアイが倒れているのを目撃したことから考えて、1770年代の初頭に何回か上陸してきたカトリック教徒のペルー軍人が、異教の偶像としてのモアイを引き倒して調べた、というのが真相だと信じている。最後まで残っていたモアイが倒れたのは1862年だといわれているが、それはペルーがイースター島民を奴隷として大量に連れ去った年に当たる。

このときから、イースター島の神話伝説の伝承者がいなくなり、また、本稿では論及する余裕のなかった特異な文字ロンゴ・ロンゴを読むことのできる神官などもいなくなったといわれる。イースター島の歴史はこの時から決定的に不明確化してしまった。

### 3. 改革派としてのマウイ

トリックスターとしてのマウイが行なったと伝承される数々の行為のうち、最も特筆すべきものとして重視されるのは、釣をしていたマウイが島を釣り上げた話である。

島を釣り上げたということは、住むに適しなかった島を人が住めるようにした、ということの意味するものといえる。それは食料の確保が困難だった小島に、栽培しやすいクマラを導入することによって、安住できる島にしたということであろう。

もう一つ注目すべきマウイの偉業は、人間が立って歩けないほど低くなっていた天空を、人々が楽に歩けるように高く押し上げた、という伝承である。

は全くなかったとっている。しかし、1774年に来島したキャプテン・クックは、幾つかのモアイが倒壊していたことを記録している。

さらに重要なことは、1722年にロッセフェーンは多くのカヌーが存在しているのを目撃したが、1774年に島内を見たキャプテン・クックは、カヌーは全島で3～4隻しか存在しなかったと書いている。カヌーがつくれるような木が全くなっていたのである。

カヌーがなくなればイースター島は完全に孤立する。16世紀末にスペインが支配体制を確立した南アメリカからは、もはや太平洋にカヌーなどを漕ぎ出すインディオはあり得ない。マルキーズ諸島その他のポリネシア諸島からは、来航できなかったわけではないが、実際には航行してくるポリネシア人は多くなかったであろう。その頃はイースター島から西方に行くことも、カヌーがないためにありえなかった。

クマラがイースター島からタヒチなどに渡って行ったのは、イースター島民の間で戦いが起こったと考えられる1670-80年頃から1722年までの約半世紀の間だったと推測しても、大きい誤りとはいえないであろう。その頃には、まだかなりのカヌーが存在していたからであった。

## 2. モアイとマウイ

私はポリネシア諸島で伝承されているマウイ神話の主人公マウイは、イースター島の巨石像モアイが変身して出現したものだ、という全く独断的な見解をもっている。

マウイ神話については、キャサリン・ルオマラ Katherine Luomala という女性人類学者が1949年に出版した、“Maui of thousand tricks : his Oceanic and European biographers” という研究が、最も網羅的に資料を駆使した古典的著作といえる。

この調査によれば、マウイを最初に記録したのはキャプテン・クックで、タヒチで見た奇妙な人形の名を聞いて Mauwi というローマ字綴りを当てた。その後、ポリネシアのいろんな島で、マウイに対して当てられたローマ字綴りはきわめて多

様で、Moi, Mai, Mo, Ma から Maau あるいは Moea など見られる。

私の手許に、メラネシアの国ソロモン諸島の南部に存在するポリネシアン・アウトレイヤーであるレンネル島、ペローナ島の説話集があるが、そこにはルオマラ女史も採録しなかった Maau が、one of the best known culture heroes としてとりあげられている。

一方、イースター島のモアイにはどのようなローマ字綴りが用いられたであろうか。

モアイの名を最初にローマ字で表現したのは、1770年にイースター島に上陸したペルーの海軍々人だったが、その時には Moay と表記していた。1774年来航したキャプテン・クックは、モアイのことを Moi と綴った。また1882年に訪れたドイツ軍艦のガイセラ艦長は、Moi Maie (Moai Maea) と綴った。

このように見てくると、モアイもマウイも Moi と綴られたことから明らかなように、イースター島からタヒチなどのポリネシアの島々に、Moai の説話が伝えられるとき、それが Maui として語りつがれた可能性があることは、誰も否定できないのではあるまいか。

それではマウイ神話は、というよりマウイという神人は、どのようにして誕生したのであるだろうか。マウイ神話はイースター島には全く存在しない。それは上に論じたように、マウイはイースター島のモアイが、他のポリネシア諸島に伝えられてマウイとなったのであるから、イースター島にマウイ伝説がないのは当然だといえよう。

イースター島以外における神人マウイは、クマラを擬人化したものと私は解釈しているが、そう考える理由をマウイの出生に関する各地の伝承の中に求めたい。そのためにマウイの親に当たる人物を調べてみよう。

**ツアモツ諸島** Tuu-ma-heke に当たる現地の人物 Mahuike(男)の娘 Huahega の夫 Ataraga が生んだ息子が Maui.

**サモア諸島** Tuu-ma-heke に当たる現地の男 Mafuie の妹 Ulu-le-papa の夫が Talauga だが、Talauga が Mafuie の娘 Vea に生ませた息子が Maui.

**ニュージーランド** Tuu-ma-heke に当たる

カ帝国によって征圧されるに至った12世紀から13世紀の頃に、征服され敗北した陣営のインディオの間で、集団的にカヌーやイカダで太平洋上に脱出したことがあったという、インディオたちの伝承を重視したい。

太平洋に脱出したインディオたちが、真直ぐにイースター島に流れ着いたとは考えられない。北上するフンボルト寒流などの影響もあって、「コンチキ」号もそうだったように、マルキーズ諸島の島々にたどり着いた可能性が高い。

マルキーズ諸島の中にヒヴァ・オア、ファツ・ヒヴァ、ヌク・ヒヴァなど、「ヒヴァ」のつく島名があることがその証拠である。「ヒヴァ」というのは、ポリネシア語では東方の陸地というような意味だが、イースター島の言語では「大陸」とくに南アメリカを指すといわれる。私はそのヒヴァから脱出してきた人たちが住み着いていたために、ヒヴァという言葉のつく島名が生まれたと考えたい。

ホツ・マツアの一行は西方から来たといわれ、その妻の名が「ヴァカイ・ア・ヒヴァ」（ヒヴァの最高のカヌーという意味）だったということは、一行がマルキーズ諸島から来たという事実を反映している。そして、ホツ・マツアの妻は上陸中に産気づいて男児を生んだが、その赤ん坊の臍の緒を切り、「ツ・マ・ヘケ」という名をつけたのは、別のカヌーで来た友人「ツ・コイフ」であった。

「ツ・マ・ヘケ」のヘケは鱗のことであるから、男児は「タコ男」という8本の手足をもつ者として、私は8つのイモが1本の茎についたクマラの象徴だと解している。「ツ・コイフ」のコイフはマオリ語で「クマラ畑のウネの間」という意味だから、クマラの栽培の巧みな人物をあらわすものといえる。ホツ・マツアの名には豊饒という意味もあるので、その上陸はクマラの到来を示す。

ホツ・マツアの上陸当時のイースター島には、どのような人種が住んでいたかについては、伝承からは全く判断できない。しかし、私としてはマルキーズ諸島経由でたどり着いたポリネシア人とインディオだったと考える。その中にはマルキーズのポリネシア人との混血人なども多かったであ

ろう。そのためにホツ・マツア体制とでも呼ぶべきイースター島の君主制は、インディオ文化とポリネシア文化を融和させる形で確立された。

モアイといわれる巨大な石像が、どんな目的で彫刻され建立されたかについては後に論ずるとして、ここでは多くの巨大石像を、それを制作した山地からの運搬するためなどに、多くの木材が切り出されたことによって、島内の森林が次第に絶滅してしまっただけでなく、カヌーも造れなくなったことを指摘しておく。また、人口は増加して行った。そこで人種的、文化的な対立抗争が次第に発生しはじめた。

1595年にペルーの副王メンドサが、スペインの侵略に抵抗した多くのインディオを、政治犯として艦隊に乗船させて、マルキーズ諸島に連れて行って釈放した、と伝えられる。その流刑者たちが人食いの習慣をもつ好戦的な原住ポリネシア人と共存することができたかどうか、対立抗争に終始したために集団で移住したかどうかは明らかでない。

しかし、16世紀末にかなりの難民がイースター島に流れてきたのは確かだといわれる。

ヘイエルダールは、その頃、イースター島に流れて来たのは、「好戦的なポリネシア航海者たち」だったことを示す立派な伝承上の証拠があるといっている。

その後のイースター島に「ハナウ・エエペ」（長耳族）と「ハナウ・モモコ」（短耳族）とがあって、前者はインディオ系、後者はポリネシア系という説もあるが、文化的宗教的に敵対するに至り、1674-80年頃に、イースター島東端部で交戦するに至ったといわれる。モアイを彫刻していた長耳族がその戦いで敗れたため、モアイの制作は、その頃に突然放棄されたわけであった。

しかし、戦いがあったからといって、島内各地に立っていたモアイが引き倒されたのではなかった。モアイは血統を重んずるポリネシア系島民のために、インディオ系住民に制作させてきたものであったからであった。

したがって、1722年にこの島を発見した日にちなんで、イースター島と命名したオランダの航海者ロッセフェーンは、この島に林立していた多くのモアイを見て歩いたが、倒壊しているモアイ

# イースター島とポリネシア文化

## ——モアイとクマラとマウイ神話——

西野 照太郎

### 1. 甘藷（クマラ）の伝来

私は1974年1月にイースター島を訪問し、そのときの見聞や経験を『イースター島紀行——語らざる島への誘い——』として、1976年に出版した。

最近、日本の企業がそのイースター島の倒れているモアイ（巨石像）を復元したり、その石像の風化した部分を補修して、貴重な文化遺産の保存に貢献する計画をもっているということを知り、その情報を複雑な気持で受けとめた。

私が複雑な気持になった理由は、この拙稿を読むことによって理解して頂きたい。

私は『イースター島紀行』の中では、モアイのことについてはかなり詳しく論じたが、イースター島の文化が、ポリネシア世界に対して及ぼした大きい影響の担い手であったクマラ（甘藷）と、それに起因したトリックスター（文化的英雄）マウイの神話には触れないでしまった。

しかし、巨石像モアイとクマラとマウイ神話との間には、切り離せない関連があるのであるから、本稿ではまずクマラのイースター島への伝来について、島に残る漠然とした伝承などを考察しながら述べておくべきだと考えている。

周知のように甘藷（クマラ）は、ラテン・アメリカが原産地である。甘藷はミクロネシアのマリアナ諸島やフィリピンにおいては、「カモテ」もしくは「カムティ」といわれる。

それは中央アメリカのメキシコ（ノヴァ・エスパニア）から、フィリピン方面に航行してきたス

ペイン船団の乗組員だったインディオたちが、甘藷を食料として大量に携行し、グアムやフィリピンでの上陸地で余った甘藷を種イモとして栽培させたが、そのインディオの郷里では甘藷をカモテと呼んでいたのであった。

これに対して、ポリネシアに渡ってきた甘藷は、「クマラ」という名で呼ばれたが、それは南アメリカのペルー付近の太平洋岸に住むインディオのケチュア族が、甘藷を「クマル」と呼んでいたからであった。ラテン・アメリカから太平洋を渡ってアジアにたどり着いた甘藷は、「カモテ」ルートと「クマラ」ルートの2派に分かれていた。

ついでにいえば、日本に来た甘藷は「カモテ」ルートでルソン島に着き、そこから中国南部を経て沖縄（琉球）にたどり着いたものなのであった。

ポリネシアにおける「クマラ」は、(K)音のないタヒチなどにおいては「ウマラ」となっているし、ハワイにおいては「ウアラ」という形になるなど、方言によって生じた変化はあるけれども、原型としては「クマラ」をとるべきであろう。

そのクマラは南アメリカから、いつ頃、どのようにしてイースター島に伝来したのであろうか。この島の最初の王ホツ・マツアが上陸してきたのは何世紀頃だったのかは、18世紀以降に来訪した欧米人が島民から聞きとった伝承——それも互いに矛盾する説話を含んでいる——によって推測するしかないが、ここでは南アメリカの情勢をも参考にしながら、私の独断的な解釈によって簡略化した形で述べてみたい。

私としては、南アメリカの太平洋岸一帯がイン